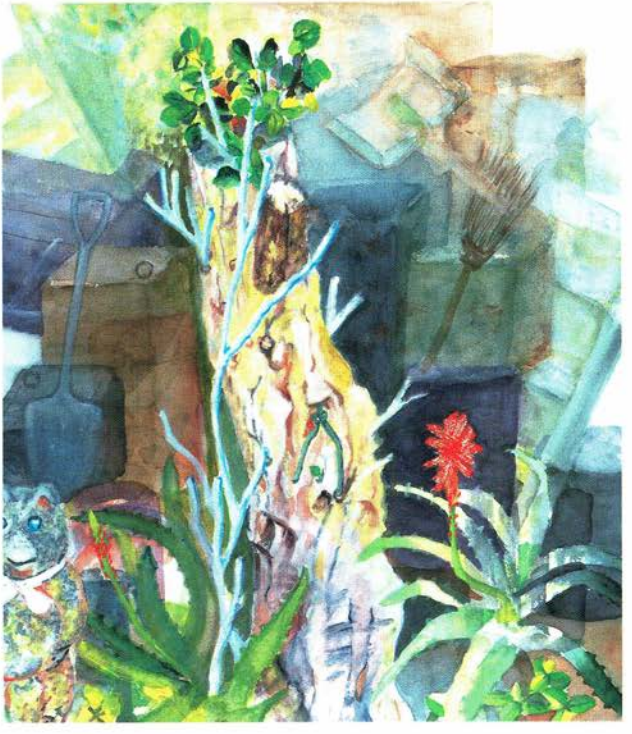
村野次郎創刊

# 香蘭



2021年(令和3年)1月号

第98巻　第1号　通巻1081号

二〇二一年(令和三年)一月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十八巻第一号

# 香　　蘭

2021年（令和３年）１月号
第98巻　第１号　通巻1081号

## 目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（65）……江口絹代……表二
作品
一……2
二……24
三……32
推薦香蘭集……38
香蘭集……39
作品一特選（十一月号）……石井・伊藤（美）・伊藤（康）・大井田・桑原・鈴木（桂）・坪・長野・西野・宮原……18
作品二・三特選（十一月号）……江口・岡野・関（哲）・中村（か）・牧田・丑山・河野・庄司・竹本・田中・馬場・藤本……20
社告（昇格）……16
歌の生まれる場所（96）……石井雅子……17
村野次郎への旅（130）……千々和久幸……22
七首抄（十一月号）……萩尾・加瀬・古川・安田……31
エッセイ・自由研究　人生の節目で経験したあれこれ……近藤光子……44
万葉集「宮廷歌人の恋と歌」―額田王―……近藤純……46
私の読む現代短歌（5）「憤怒の人」坪野哲久……田中あさひ……50
焦点（十一月号）採れなかった歌（問題作）……丸山三枝子……52
作品評（十一月号）作品一……西野美智代……54
作品二……関哲行……56
作品三……市川義和……58
香蘭集……桑山君子……60
文法あれこれ（20）……田中あさひ……62
緑地帯……牧田・竹内・市川……64
明宝研究会第一一八回十月例会……牧野道子……66
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……70
他誌拝見118……関哲行……72
歌会及び会合・会員消息・本社歌会、他……76
編集後記・新宿日記……80
表紙絵……中村陽子「おしゃべりな木」　目次・緑地帯カット……和田和雄……表三

村野次郎作品　私の愛誦歌（65）

江口絹代

ささやかにとりし朝餉の京菜漬花
芽まじりて春深まりぬ

『樗風集』

私が村野次郎の歌集『樗風集』を初めて手にしたのは、平成二十五年の全国大会の時でした。それまで次郎先生の歌は、香蘭誌の中だけで拝見する、遥かに偉大な歌人の歌という存在でした。

しかし、一旦手に取って拝読すると、その歌は優しく、気高く、なぜかとても懐かしい感じさえするのです。驚きました。そして一挙に、村野先生は私の中に親しく降りて来て下さったのです。

今回、好きな歌があまたある中、私好みの食卓の歌を選んでみました。昭和八年の「折折の歌」の一首です。

他に昭和三年の「春来る」の中から、もう一首。

• 物思ひにふけりて食ぶる朝の飯石をはげしく
　嚙みあてにけり
　共に春の歌です。

（短歌新聞社文庫『樗風集』62頁に掲載。『村野次郎三百首』には入っていない）

# 四選者の作品

## 狗尾草

平塚　千々和　久幸

シャツその他洗って干して忙しなきひと日が途方に暮れんとぞする
スズメバチが蟬を仕留めて食うさまを写メールに送り来しこころはや
老人がいつも座っている席に今日はわが来てコーヒーを飲む
金網より鬼百合の花覗けるにおやすみを言う夜道の帰り
気の向けば声を聞かせよ一人にて見るには惜しき満月の出づ
枯葉ほぼ散りつくしたる道を来て声にはならぬ声あげんとす
道の辺のえのころ草が揺れているこの人もいずれ離れゆかんに
看護師が送りくれたる画像にて妻が時折まばたきをせり

## 優先順位

東京　桜井　京子

片耳をちょんと切られて日溜りに誰かをいつも待つてゐる猫
たよりなく庭に立ちゐし彼岸花ことしは咲かず彼岸を過ぎつ
優先順位まちがへるなと言ふ人よ今日のわたしはなんにもしない
騙されてゐるかも知れず舌の上に甜茶(てんちゃ)の甘味ほのか残れる
叱られて開きなほるはお前とぞ夕陽の中の赤いポストよ
早口をなほせと言はれた気もするがいまも変はらず変はるものかは
道沿ひにアベリアの花散りこぼれ何が駄目かがだんだん分かる
アカミミガメ沈んで浮いておまへもか明日のことはもう思ふまい

## トラ猫よ

横浜　渡辺　礼比子

はかどらぬスイートコーンの裏ごしにいつしか今日の憂さを忘れぬ
よかれとて尽くす力の方向がズレていたのか　ねえトラ猫よ
〈新しい生活様式〉など知らぬずるずる元の日々に戻れる
「病室の薄きカーテン明け易し」父の遺品の紺の手帖に
「新宿へいってきました」わが言えば一座に潮の引く気配あり
クレープ屋にマスクの人ら列をなす小町通りも楽しくあらず
窓際のキャットタワーに汝れは居き雨の日はただ雨をながめて
コットンのマスク洗えりつづまりはどの人の説もこころもとなく

## 兄逝く

鎌倉　香山　静子

ふんはりと兄のマントに庇はれて雪道歩みし少女のわれは
兄真似て作れるカードを操りながらいつしか覚えし英語の単語
この世にはもう居ない「お兄さん」せめては会はん夢の中にて
久々に帰れる兄に社交ダンスのステップ習ひし雪のゆふべよ
歌手になる願ひ諦め役人になりたる兄よ　幸せでしたか
この世では適はぬ夢かテノールに好きな歌など歌ひて居らん
眼つむれば聞こえて来るよ兄の声「君と語らん鈴掛の道」
あの世にて父母兄ら打ち揃ひ昔話などしてゐるならん

# 作品一特選

（十一月号作品から）　　渡辺礼比子　選

ミズスマシ　　習志野　石井雅子

海開きなき湘南の海の日よサザンは無観客コンサート
同心円の水輪いくつも流れきて水路におよぐミズスマシ見つ
泳ぎきてターンに顔を上げるとき流れる汗の匂がしたり
アルコール消毒にわが手荒れゆくにアルコール漬けで逝きたりし君
夢にきて何も言はずに行く人よ　ゴキブリが戸口に死んでゐた朝
冷蔵庫開けては閉めて去りし後また一人きて家族ゐし夏

・嗅覚、運動感覚、触覚等を詠み込み歌の世界を広げている。

ズッキーニ　　川崎　伊藤美恵子

道子さんが駅ピアノ弾くその姿見たし弾いてる曲も聞きたし
雨音に十重に二十重につつまれて山の古屋の眠りたのしも
地震来るとわれを起こして真夜中にスマホ騒げど微動だにせず
庭先から元気ですかと声かけてそのまま帰るコロナの時代
誰が料理しているのだろう喪の家より包丁使うはげしき音す
袋からあふるるばかりのズッキーニ届きしが困るズッキーニでは

・違和感を発見する目のある作者。五首目はドラマを予感させる。

暮れ行く　　東京　伊藤康子

川沿いの係留ポールにぽつねんと川鵜の留まり夕闇迫る
鳴らすならシャンシャンシャララ撓る珊瑚樹の実を過ぎゆく風の
焼き鳥屋の兄ちゃんが毎日水を遣る向日葵のれんを越えて伸びゆく
徹夜明けからっぽのわたしの脳髄の底へ朝の光差し込むごとし

「特別な夏」に続いて特別な秋冬となり暮れてゆくらむ

・二首目は視覚を聴覚で表現した。四首目は比喩に新鮮味がある。

ミニトマト　　川崎　大井田啓子

さはさはと真夏の風が通りすぎミニトマトまたひとつ熟れたり
届きたるジャムは手づくり卓上に瀬戸内の風甘く漂ふ
闇に浮く月下美人の白き花ひと夜かぎりとあれば親しも
ゆふやみの木ぬれに法師蟬鳴くを見上げてをれば声かけらるる
雨風に白芙蓉が揺れてをり予定変更まだ間に合ふか
朝なさなトマトに会ひに庭へ出る雨の日は傘をさして眺むる

・クールな認識に支えられた歌。六首目、視点の外し方が巧い。

サンダル　　東京　桑原祐子

マスクして手洗いをしてマスクして手洗いをして感染減らず
抗がん剤にて三年過ぎしと淡々とメールが届く十六夜の月
Tシャツにサンダル履いてマスクして新嘉坡に赴任してゆけり
水底より揺らぐ水面を見上げてたあの夏のことあのひとのこと

権力に刃向う男の眼が素敵なんて思ってずうっとテレビ

・リフレイン、句跨り等の技法を自在に操り奔放に詠む。

八　月　　西宮　鈴木桂子

さるすべり咲く道のべによみがへるちちのみの父たらちねの母
婚せざる二人子思へばかにかくにいとしきかもよ悲しきかもよ
わけもなくきみも私も強かつた学びの道にともに在りし日
ことわれず猛暑の夜をくるしくもシャツ脱ぎ捨てて原稿を書く
くずほるるごとくに眠るは疲れ果て労働のみの疲れにあらず
このところ飲みすぎならむボトル手に「命のキケン」と聞けどまた飲む

・重くなりがちな内容を巧みに加工して読者を惹き付ける。

自転車　　東京　坪裕

明け方を待っていたのか白壁に浸み入る如く鳴く油蟬
清少納言もすだれの内に聞きいしかみんみん蟬は熱く鳴きおり
あめんぼの浮かぶ水面に響きくる森を揺がす八月の蟬
おおぞらを渡りきたのか自転車は露にぐっしょり濡れて休めり
夕暮を鳥が飛びゆく世の中をしっかり観ている鳥になりたし
山奥の青葉の陰のけもの道老いし狐の飄飄と行く

・四首目はポエティックな童画。六首目は自画像を投影するか。

脱　力　　横浜　長野道子

長雨に花屋の花の値の上がり今日買いたるは外つ国の菊
ラジオより合唱曲の流れきて伴奏パートをハミングしたり
丹念に拭き掃除する朝々を時折屈み脱力をする
蔓延の衰えゆかぬウイルスよもうすこしあたし生き延びるわよ
逆さまに火鉢が夏は花鉢の土台となりてハイビスカス咲く

・ノンシャランな身ぶりで逆境を覆す。迫力漲る五首目に感服。

八月九日　　東京　西野美智代

じやがいもを育て平和に暮らしたい〈ムーミンの日〉けふ八月九日
聞かされし話にどんどん近付けりどんなことでもノーと言へるか
蛤の碁石の一部欠けたるを抽出し奥に夫は遺しつ
遺されしインク吸入のモンブラン　時代後れの持主に似る
朝顔とりんだうの絵の切手貼り友より届く利根川の風
渡哲也逝き男の美学と囃さるる女にだつて美学はあるに

・反骨精神も追慕の心もウイットに包む。洗練された一連。

梅雨深き　　倉敷　宮原迪恵

寡婦となり七年経ちぬようやくにこの寂しさが愛しくなりぬ
夜の雨の窓打つしずけさ梅雨ふかし家族らははや寝につく頃か
昨日より続く小雨の降る気配夜半に目覚めて咳ひとつする
今年初の朝顔咲けり幸せはよそからは来ずここにあるのみ
眠られずおりし真夜中救急車二台続きて後の静けさ

・上句から下句への転換に工夫があり、力の抜き方が巧い。

# 作品二、三特選

（十一月号作品から）　丸山　三枝子　選

〈作品二〉

風となりゆく　柏江口絹代

イタリアのような光が射してきて紅きカンナがカンカンと咲く
夏茗荷の花咲くころに裏山の蜩たちが風となりゆく
赤玉子をひとつふたつと剥いてゆく朝が嬉しい八月である
いつの日か一人になりて旅立つとさびしい色の朝顔に言う
やわらかく雨降る夜の子つばめのへの字の白きくちばしが見ゆ

・リズムにのせて詩情ゆたかに詠む。一首目の比喩、五首目の描写に注目。

絵灯籠　尾道　岡野甫江

夕風が潮の香仄と運びくる庭に膝つき門火をたけり
灯とぼせば秋草まはる絵灯籠亡き人顕ちくる夕べとなりぬ
祈りの灯は願ひの灯へと移りきて七十五年目の夏を迎へる
猛暑日のつづくやまとの国原にコロナ禍いまだ先の見えざり
蟬も鳴かぬ猛暑のひと日暮れしかば海を分かちて釣船かへる

・生活や時事を詠みつつ、そこに自ずからなる情趣が滲む。

レナウン頑張れ　大分　関哲行

蛇口よりお湯が出てくる昨日今日明日も出るらし猛暑の続く
去年の今日宗谷岬目指して旅立ちぬ猛暑でありしがコロナは無かった
亡き父が大事に着ていしダーバンを我も着たるよレナウン頑張れ
日本一のアパレルだったレナウンの「レナウン娘」よ再び歌え
氾濫の危険水位まで二メートル　我が住む団地生き長らえた

・レナウンへの思い入れと懐古を込めた三～四首目が新鮮だ。

かざぐるま　福岡中村かよ子

風車の乾いた音に時々は恨みのごとき風が鳴りゆく
風車は動き出す時少しだけ悔いているごといやいやをする
風車の三つ揃って鳴き出せば金剛杖もふと立ち止まる
ゆく夏の名残のように風鈴がチリンと鳴った夢の中にて

・「かざぐるま」に負の感情を巧みに映像化して詠み、説得力がある。

八月の死者　藤沢牧田明子

語ることなき八月の死者たちへひぐらしの声夕べ透きとほる
明日また子らを迎へるこの校舎夕映あつめてどつしりとせり
しづもれる校舎の窓の一つには明かり点りて残業の教師
振りかへる空夕やけて鷹匠橋の残るこの地に親しみて来ぬ

・重くなく軽くもないリリシズム。「鷹匠橋」の固有名詞がいい。

〈作品三〉

同感したり　　さいたま　丑山眞弓

クリップや洗濯ばさみを考えた人の頭を覗いてみたい
政府から来たる調査の性別に男と女とその他がありぬ
怖いもの地震かみなり火事おやじ今はコロナと台風加わる
香蘭の八月号のエッセイの宮口弘美に同感したり
人の世は複雑なりと悟りしも女の園には妖怪がいる

・日常の死角をきびきびと掬い、ウイットに富む歌に仕上げた。

クラクション　　鎌倉　河野慎二

目を閉ぢてゐても寝付けぬ秋の夜のかくも澄みたる誰がクラクション
紅の薔薇を愛するこの俺が五十のおつさんなんて嘘
靴音はふる里の音ゆく夏の薔薇の匂へる夜に帰り来
草を抜くたびに私は草を抜くだけのわたしに澄みゆきにけり

・四首目は、草に同化しながら心の深部を凝視したユニークな把握である。

ミンミン蟬　　横浜　庄司健造

骸なるミンミン蟬はどれほどの時を鳴いたか立秋となる
踝を水に鎮めて青鷺は瀬の白波を見すえておりぬ
前髪の奥の目力盤上に二冠ひきよす8七同飛成
青空にコロナウイルスいないから入道雲は意のまま遊ぶ

・一首目の蟬に過ぎた時間、二首目の感情移入、四首目の把握の柔軟さ。

回転扉　　千葉　竹本幸子

気兼ねなくセミは網戸で鳴きつづけ人間だけが「特別な夏」
コロナ禍に他人との距離が大切と心も離れてゆきそうになる
GoToキャンペーン行って良いのか悪いのか回転扉抜け出せずいる
がらんとした整形外科の待合室不要不急の人は来ぬなり

・コロナ禍連作の二首目の下句への転換の妙、四首目の機知に納得した。

露草一花　　取手　田中あさひ

梅酒はも琥珀の色に変化せよ透明といふあやふきを捨て
梅雨の神いまし日本にいたりつき露草一花まづ咲かせたり
梅雨の神タクトをふらばひらくべし露草アガパンサス桔梗の花
梅雨明けを待ちきれず鳴くみんみんの体内時計の針ふッきれて

・梅酒、季節の花、みんみんを際立たせる鮮やかな展開で読ませる。

命を濯ぐ　　松江　馬場美信

ひと粒の雨も降らない八月の抹茶アイスは命を濯ぐ
一面のひまわりのなか歩くとき人は一瞬翅を広げる
スーパーの青果売場の夏キャベツ二つに切られラップに巻かる

・どれも、常識に囚われない下句の飛躍で歌が立ち上がった。

補助線　　常陸太田　藤本佐知子

自粛後の少し寂れしわが町を旅人のごと見て通りゆく
まっすぐな補助線一本ひきたれば胸のつかえが消ゆるここちす
数多咲く向日葵のなかひとつだけうつむき咲くはきのうのわれか

・一首目の事実からの浮上、二首目の見立て、三首目の擬人化の味わい。

村野次郎への旅（130）

# 「ザムボア」と次郎（二十二）

千々和　久幸

前号に引き続き大正七（1918）年発行の「ザムボア」（朱欒）第九號から、作品以外の内輪向けの文章を読んでおこう。その一つが愼吾、次郎の「八月號歌評」である。

・五月雨の降りみ降らずみ日を經ればおのづからなりものうさ湧くも　筏井　嘉一

○村野。老巧な歌ひ振りである、歌にする呼吸をよく飲み込んでゐる、しかし餘り物に慣れ過ぎないやうに注意されたい、「おのづからなり」はおのづからなるの間違と思ふ。

○河野。「おのづから」と云ふ言葉に興味を持ち過ぎてゐる。斯う云ふところに興味が凝固して居ては、先輩の糟糠ばかり嘗めて居なければならぬ。ここより一歩踏み出さなければ、生き生きとした生命が流れ出ぬ。この点は特に注意しなければならぬ。技巧末に堕ちては表面だけの美しさはあつても、熱、力、深さがない、要するに永遠の命がなくなる。之れはだれにも氣をつけて頂きたい。

・赤子の寝息かそかにせはし煙草とり吸うて見たれどかそかにせはし　深野庫之介

○村野。どこかによい所があるやうである。捨てられない。

○河野。作者はだんだんよくなつて來たが、この一首は言葉ばかりがせはしくて、ほんとに静中の動と云ふべき作者の驚きが出てゐない。どつしり態度を据へて氣の熱するをまち静かに詠下したものでなく、すぐさま歌にしたと云ふどことなく態度が浮動してゐるところがある。ただ概念だけ「せはしい」と云ふものを讀者に注入するばかりで、眞の「おどろき」が出て居ないのはこの歌の欠点であらう。

次郎、愼吾の歌評は今日読んでも参考になる個所が多い。嘉一作品に対する「慣れ」は的確な批評で、なるほどその通りだと思わせる。一方の庫之介作品の「言葉ばかりがせはし」いも納得出来る。つまりは歌にすることに逸り、「溜め」を等閑にしたということだろう。現在のわたしたちの歌にも言えそうな基本的な事柄である。

・打ち續く野路のかなたを行く人の笠てるまでに日は盛りなり　二木　水明

○村野。よい所を見てゐる、笠に照る日を見付けたなどもよい。欠点は技巧上にある、野の路の續いてゐる形を初めに「打ち續く」と張りのある言葉を用ひ表現しては、事が稍荒立つて來る、言葉が少し威張り過ぎる様に思はれるのである。「笠てるまで」のまでも事實上から言つて妥當でないやうに思はれるがどうであらう。歌の手心がわかつた爲め又は句調の上からつい心にも無いことを言つてしまつたと言ふ弊がありはしまいか。

○河野。一氣に讀み下すと淀みなく歌はれてゐるやうであるが、力に乏しいことが氣につく、「笠てるまで」も味をやり過ぎてゐる。それに「うち續く野路のかなた」だけではその景象がはつきりしない莫然としてゐる。ただ

讀者に「野路」と云ふ概念を示すだけである。特長をしつかり掴んで居ないからであらうと思はれる。

ここでも適切な批評がなされているが、面白いのは評者の体臭を思わせる独特の批評用語である。村野の「事が稍荒立つ」「言葉が威張り過ぎる」「歌の手心」、河野の「味をやり過ぎてゐる」などは砕けた話し言葉のようで、読者に親しみを与える。

翻ってわたしたちの批評用語はいかに個性に乏しいかを反省させられる。わたしはかねがね「作品より面白い批評を、作品を越える批評を」と自分に言い他人にも吹聴しているのだが、未だに手応えのある批評が書けないでいる。

さてついでに村野先生の息遣いの聞こえる巻末の編輯餘錄を読んみよう。

□八月の中頃と言へば何と言つても暑さは烈しい、籐椅子に身を横たへて思ひ思ひに遠く山や海に出かけた諸君のことを思ふのは樂しみなことです、草舍から送つて來た原稿を日陰の窓下や土藏の間の風通しのよい所と持ちまわつて調べてゐます、夏は兎角なまけ勝ちになつて、いけないものです、手紙の返事すら失禮してしまふことが無いとも知れません、しかし「朱欒」の原稿だけは必ず見ない譯には行きません、そして人々の歌が如何に發展して行きつゝあるかと言ふことを見るのは大變樂しみなものです、一首でも見落しがあつてはならないと一生懸命です、実際人間は責任があると偉いものです。

□以前から比較すると原稿の字が一般に綺麗になつたのは實にうれしいことです、用紙の大小等は田舍でも半紙判のものを必ず買整へると言ふことは不可能だから仕方がありませんが、若しや小さい用紙は印刷屋で抜け出しはしないかと心配してゐます原稿用紙と違つて字はどんな田舍でも丁寧に書けないと言ふ筈がないと思ひます、文字が間違つたり假名使が違つたりする人が時々見える様です私等も専門の国學者でもなし、それにそゝつかしい方だから加成間違へることもあるが世間一般使用してゐる字や自己の歌に對してだけでも愼重の態度をとりたいものだと思つてゐます、六ケ敷い字は字引を引いて見ればよいのだし、自己の歌に對して字引を買つて見る位は短歌を作る人の當然の義務だと思ひます。

□半年一年と續けて歌を作つてゐる人は本人には分からないかも知れないがだんだん上達して行くやうです。中には二月か四月經つてとても上達の見込が無いと言つて止めてしまふ人があります、又三つも四つもの雜誌へ出して中で一番具合のよさ相な雜誌へ入り込まふ等と考へてゐるらしい人があります、自分の歌に對してそんな節操の無いことで何うする事だと思ひます、岩に喰ひついても離れないと言ふ位の量見が無くつてはとても歌の上達は覺束ない話だと思ひます、長い間に浮き沈みがあるのは勿論です、そこが世の中と言ふものぢやないかね、今の「朱欒」にさう言ふ人が少ないのはほんとにうれしいことです。

この長い編輯餘錄はさながら『次郎歌話』の趣である。村野先生の肉声に親しく接する思いで味読した。真夏の選歌風景、またこの時代には都市と田舎では文化水準にこんな差があったことも理解出来た。

さりながら「文字は綺麗に」だの「字引を引け」だの編集人の苦労は今に変わらないところが可笑しくもあった。